批評

カーター氏著『支那に於ける印刷の起源』

Carter ; The Invention of Printing in China. pp. XVIII, 282. 1925.

文學博士　桑原・隲藏

一

Ex Oriente Lux といふ諺は、可なり古代から行はれて居るやうだが、古代は姑く措き、中古や近古の西洋に對しても、東洋文化の影響は頗る大い。文運復興時代に歐洲に現れて、近代文化を開くに預つて尤も力あつたと稱せらるゝ紙の發明、印刷の發明、火藥の發明乃至羅針盤の發明等は、何れも東洋から直接に傳來し、若くは間接に影響されたものと認められて居る。この四大發明の中で、紙の發明は支那が本源で、サラセン國の媒介で、歐洲に傳來したものであるといふ事實は、近時に至つて、實物上からも、文獻上からも、雙方から確實に立證された。羅針盤の發明も火藥の發明も、支那に起源したといふ事實の蓋然性（プロバビリチイ）は、日に鞏固を加へつゝあるが、その西方傳播の經路は未だ明瞭にされて居らぬ。印刷の發明が支那に起源した事實は、今日で最早殆ど疑惑を容れぬが、但その西方傳播の史實が未だ究明されて居らず、從つてこの點に關する東西文化の交渉が不明である。カーター氏はこの方面の開拓に努力して、こ

の新著を公にした次第である。

カーター氏は目下米國のコロンビア大學の支那學の助教授を勤めて居る。氏はこの研究の爲に、親しく歐洲や支那に渡航して材料を調査し、殊にロンドン、ベルリン、パリ等では、シュタインStein氏やペリオPelliot氏や、ル・コックLe Coq氏等が、新疆や甘肅方面から將來した、印刷に關係ある材料に就いて實地の調査を遂げた。カーター氏は又支那の印刷の歷史に直間接の關係ある、歐米は勿論支那の記錄や論文をも廣く參考し、日本の著書も幾分參考に資した。加之カーター氏は、到る處で有名なる東洋學者、例へばコルヂエCordier、ペリオ、ヂャイルスGiles、ル・コックヒルトHirth、ラウファLaufer、アレキシエフAlexeiev、ジャクソンJackson諸氏を始め、幾多の支那學考古學言語學等に通達せる人々の指導と助言とを受け、殊にペリオ氏はその原稿に熱心なる校閲を加へたといふからには、この新著の內容が、從來公にされたこの種の書籍に比して遙に卓越すべきは、冒頭より所期するに難くない。

この書は本年の秋に出版されたもので、僅に十日餘り前に吾が輩の手許に到着したもので、未だ十分に精讀の餘暇を有たぬが、兎に角一應通覽したから、その內容の大略を紹介し、併せて之に二三の批判を加へたいと思ふ。先づ本書の內容は序論、本論、注釋（Notes）解題にわかれ、更に約四十の有益なる插畫——多くは新疆や甘肅から發見された材料——及び興味ある二附表に索引まで備へて、體裁は遺憾なく整つて居る。

二

さて著者カーター氏はこの書の序論に於て、過去の歐米に於ける支那の印刷の歷史的研究の來歷を說いて、著者がこの研究を志すに至つた動機に及び、併せて彼の新著の完成を助けた重なる材料

や、重なる學者を紹介して居る。

その本論はすべて四篇より成り、その第一篇は「支那に於ける印刷の背景」と題して、更に四章より成立する。第一章「紙の發明」に於て、著者は印刷と尤も密接の關係ある紙が、後漢の蔡倫によつて發明された前後の事情を紹介し、併せて從來東洋から歐洲に傳來した紙は綿紙 Cotton-paper で、今日一般に使用されて居る繊維紙 Rag-paper は、西暦十五世紀に獨逸人若くば伊太利人の發明に係るといふ謬說は、西暦一八八五年にエヂプト地方から將來された、西暦九世紀から十四世紀にかけての紙が、皆立派な Rag-paper であることが證明されて以來打破されて、之に代つては Rag-paper は中古期にサラセン人の發明したものといふ說が一時信憑されて來たが、之も一九一一年にシユタイン氏が敦煌方面で蒐集した西暦二世紀の紙――蔡倫の發明後間もなき時代の支那製の紙――が純粹な Rag-paper であることが證明されて以來全然打破せられ、今日では世界の Rag-paper の發明者は全く支那人で、支那人の製紙の方法も使用の材料もその儘に、世界各國に襲踏されて來た事實が明白となつた次第を紹介して居る。

第二章の「印章の使用」、第三章の「石碑の榻拓」に於て、著者は木版印刷の先驅とも認め得べき、支那に於ける印章 Seals 及び碑刻の歷史を述べ、第四章の「印刷の要求を促進した動力卽ち佛敎の隆興」に於て、廣く世界の歷史を達觀して、宗敎と印刷との關係の密接なる事實を述べ、支那に於ける印刷の發達も宗敎殊に佛敎に負ふ所多大で、支那の印刷が佛敎隆興を極めた唐時代に起つたのは偶然でない理由を指摘して居る。

三

本書の第二篇は「支那に於ける木版印刷」と題して、第五章乃至第十一章に亘るすべて七章を包

括する。著者は「第五章の支那に於ける木版印刷の意義及び墨」に於て、主として支那墨の製法と用法とを述べ、この墨は木版印刷に尤も適當なるも、金屬製活字印刷には不適當で、支那に於ける木版印刷が發達せる割合に、活版の發達を見得なかつたのは、主として支那文字の特質――漢字が表意的文字で活字に不向である――に原因するが、この墨の適否も亦預つて力あつたと論じて居る。

次の第六章の「支那の佛院に於ける木版印刷の起源」に於て、著者は近時敦煌や吐魯番地方から發見された諸種の佛像、就中捺印された佛像(Stamped Figures of Buddha)を以て、木版印刷への過渡期の產物と認めて居る。捺印その物も發見されたが、之には使用の便利の爲に柄がついて居る。澤山な同一の佛像が一枚の紙に捺印されたものも發見された。何れも捺印の場合は小さい佛像に限るが、若し少しく工夫を加へて、紙を下に置き上から捺印するのを改めて、その反對に印を下に置きその上に紙を加へて、拓碑の場合の如き取扱をしたならば、印の面積が大くなつても差支ない。かくて木版印刷が出現する順序である。西暦八世紀の後半に印刷された我が百萬塔の陀羅尼摺本や、九世紀の半頃に印刷された敦煌發見の金剛經から推すと、捺印佛像から木版印刷への變遷過渡は、恐らく唐の玄宗時代前後に起つたものであらうといふのが、著者カーター氏の見解である。

第七章の「日本の稱德天皇及びその百萬塔に納められたる印刷の呪文」に於て、著者は印刷の歷史上尤も記憶すべき、この世界に現存せる最古の印刷物を委細に紹介し、次の第八章「印刷された最古の書物」では、シュタイン氏やペリオ氏の探檢によつて、世界的に有名となつた敦煌の千佛洞の紹介から、更に進んでシュタイン氏によつて茲

で發見された、咸通九年（八六八）刊行の金剛經卷を委細に紹介して居る。尙は著者は敦煌から發見された幾多の印刷物の實例によつて、支那の書籍が卷子本から折本を經て、今日の體裁に變遷した經路にまで論及して居る。

第九章は「馮道の儒敎の經典刊行」と題して、唐代に主として佛書に限つた支那の印刷が、五代時代に馮道によつて儒書を刊行するに至つた事實を述べ儒書の刊行と共に印刷が支那の文化の促進に大なる寄與をなした次第に及び、次の第十章の「支那に於ける木版印刷の最盛期」には、宋元時代約四百年を通じて、各方面に於ける印刷の發展を述べて、大藏經や道藏の刊行に及び、最後の第十一章は「紙幣の印刷」と題して、支那に於ける紙幣の發行及びその印行の歷史を述べてある。蓋し元時代に紙幣が盛に印行され、それが波斯に傳はり、又支那觀光の西洋人の大なる注意を惹き、兎に角次篇の印刷術の西播といふ問題に、可なり重大なる關係を有するやうであるから、著者は特にこの一項を設けたものらしい。

四

本書の第三篇の題目は「木版印刷の西播」で、第十二章乃至第二十一章に亙るすべて十章より成る。その第十二章「〔所謂〕絹街道を通じて古代に於ける〔東西の〕の互市」は、兩漢時代唐時代元時代に於ける東西の交通を論じ、この間に支那から西方に傳播したと想はるゝ火藥、羅針盤、瓷器、茶等に就いて簡單なる紹介をして居る。第十三章は「紙の支那より歐洲に渡れる一千年間の行程」と題して、後漢時代に支那で發明された紙が、唐の中世にサラセン國に傳はり、更に北アフリカからスペイン、フランスを經て、歐洲諸國に擴つた約一千年間に亘る、支那紙西播の歷史を明瞭に記述して居る。前章と共に印刷術西播の經路を暗

示する用意らしい。

第十四章の「吐魯番(トルファン)地方に於けるウイグル(回鶻)種族の印刷」に於て、著者は西域の吐魯番地方は、漢時代から唐宋時代にかけて東西交通の要衝に當り、支那、印度、波斯諸文化の會合點となつた事實を、主として獨逸のこの方面に於ける探檢の結果に照らして立證し、殊に吐魯番地方は後くも十三世紀の初期若くばその以前に於て、印刷術の頗る發達した實證があり、而してこの吐魯番地方を根據として印刷術を會得したウイグル種族が蒙古軍に優遇せられ、蒙古軍の西進する所にウイグル文化の隨伴せることを注意して居る。

第十五章「印刷術西播の障壁としてのサラセン國」の題下で、著者はイスラム教徒が印刷術を歡迎せず、現に彼等の聖典コーランが十九世紀に至る迄、イスラム教國で曾て印行されなかつた事實を擧げ、東洋に流行した印刷が早く西洋に傳播せなかつた所以は、東西兩洋の中間に介在するサラセン國の事情に本づくことを述べ、次の第十六章の「蒙古時代に於ける支那と歐洲との會合」に於て、蒙古の勃興によつて、このサラセン國の障壁が打破せられ、東洋人は直に歐洲內地に侵入し來り、殊に露國をその領土に加へ、ノヴゴロドやモスカウに支那人街が出來、また歐人の極東に出掛けた者が多いから、この間に歐人の印刷術を傳へ、若くば印刷術を知る機會多かりしなるべく、蒙古時代の末期から、歐洲に於ける印刷の曙光の閃き初めたのも偶然でない意見を述べ、併せて最近羅馬教皇の寶藏から發見された、西曆一二四五年に蒙古の貴由(クユク)汗から教皇インノセント四世に贈つた返翰は、ペルシャ語ウイグル語で書かれ、露西亞人コスマンの手で刻したと信ぜられる、支那風の蒙古の國璽を捺したもので、之を蒙古の國都喀喇和林(カラコルム)から羅馬に至る間を、伊太利の僧侶のプ

ラノ・カルピニ Plano Carpini が齎らした事實を指摘して、蒙古時代の特色を發揮せる事件に注意して居る。

第十七章は「東西兩洋の交叉點としての波斯」と題して、波斯の伊兒汗國と歐洲諸國との關係の親密であつた事實、當時の波斯の首都タブリズ Tabriz に、北支那人、南支那人、チベット人、ウイグル人、蒙古人、印度人、アラブ人、歐洲人等が來集して、一の世界的都會を現出した事實、殊に西曆一二九四年にタブリズで、支那の紙幣に倣つて紙幣を印行して之を國内に通用させた事實は、當時タブリズに印刷職工の存在した證據で、タブリズに來集した歐洲人、殊に多數の伊太利の商人等が、この紙幣の發行や印刷職工の存在を目擊する機會が多かつた事情を述べ、その最後に著者は、

蒙古時代に歐洲人は、支那人やウィグル種族の間に發達した印刷術を目擊すべき機會が多かつた。蒙古時代が終るこ間もなく歐洲に木版印刷が現れて來た。この歐洲の木版印刷は東洋から傳來したこいふ、何等積極的な文獻上の確證はない。されこ當時の事情から推すこ、露西亞を通じてか、支那に居た歐洲人の手を經てか、波斯を通じてか、乃至エヂプトを通じてか、兎に角支那の木版印刷が歐洲へ影響して、歐洲の印刷の興起こ發達こを刺戟したものこ承認すべき餘地が極めて多い。

と結んで居る。

五

次の第十八章の「十字軍時代にエヂプトに於ける木版印刷」に於て、カーター氏はウインのライネル公爵紙研究處所藏のエヂプトで發見された印刷――西曆九〇〇年頃から一三五〇年頃までに亙ると考定されて居る――に就いて論じて居る。エヂプトの印刷は自國で發生したものでなく、支那

若くばその附近から傳來したものと認むべきことは、專門家の間に異議がない。勿論何時代に如何なる道筋を經て、エヂプトに傳來したかは明指することが出來ぬ。西曆十一世紀の末から十二三世紀にかけて丁度十字軍の時代で、耶蘇教國とイスラム教國と交渉頻繁の時代であつた。從つて歐洲の印刷とエヂプトの印刷との間の關係の有無は、十分研究の題目とするに足るといふのが著者の意見である。第十九章は「印刷術の西進の一要素としての骨牌」と題して、著者は骨牌Playing Cardsの歴史を述べて居る。骨牌は十四世紀の後半期から歐洲諸國に流行し、その最初から若くはその初期から印刷された。一般に歐洲の骨牌はサラセンから傳來したものと信ぜられて居るが、骨牌はサラセン人よりも寧ろ支那人の發明で、蒙古時代の支那人は盛に印刷した骨牌を使用した。蒙古時代に西亞細亞に出掛けた支那人、例へばタブリズの支那人街に住居した多數の支那人等の間には、必ずこの骨牌を使用せしなるべく、恐らくば彼等の需要に應ずべく、その地方で骨牌の印刷も行はれたものと想像される。十字軍や通商の目的でサラセン人の土地へ來た多數の歐洲人が、この新奇な遊戯を見て喜び、之を歐洲に傳へしことは、想像に難くない。古來歐洲の骨牌はサラセンより傳へたといふ說の由來は、サラセン人の地を經て、〔支那に起源した骨牌を〕傳へたものと解釋すべきであるまい歟。かくて著者はこの章末に、

> 蒙古時代以前から支那では印刷した骨牌が使用されて居つた。蒙古時代の直後に歐洲へ骨牌が現はれて來てそれが東洋傳來のものと認められた。歐洲へ現はれた骨牌は殆どその初期から印刷されて居つた。骨牌は歐洲で出來た印刷物の中で一番古いもの、若くば一番古い印刷物の一であつた。これだけの事實は正確であ

る。故に骨牌と共に支那の印刷術が歐洲に傳來したものと速斷するのは安全ではないが、木版印刷術が〔東洋から〕歐洲へ傳來したものとせば、この骨牌がその間の〔媒介者として〕尤も重要なるものと認めねばならぬ。

と附言して居る。

第二十章には木版印刷と幾分關係ある印刷織物 Printed Textiles の歷史を、世界各國に亙つて叙述してある。「織物に印刷すること」がその章の題目である。この篇の最後の第廿一章は「歐洲に於ける木版印刷」で、著者は十四世紀の後半から歐洲に現はれた木版印刷卽ち肖像印畫 Image Print はその畫題といひ、その刷方といひ、その用墨といひ、その他すべての條件に於て、支那の印刷に酷似せることを指摘し、この兩者の關係を明にすべき直接の證據は不十分であるが、兩者の關係を否定するよりも、歐洲の木版印刷の起源の一要素として、支那の影響を承認する方、遙に合理的なるべきを主張して居る。

六

本書の第四篇の題目は「活版印刷」で、第二十二章より第二十四章に至る三章を含む。

著者は第二十二章の「支那に於ける活字版の發明」に於て、北宋の畢昇が活字版を發明して以來の支那に於ける活字版の發達を述べ、第二十三章の「朝鮮に於ける活字版印刷の大發展」に於て、朝鮮の開國以來銅活字を鑄造して盛に書籍を刊行し、その銅活字は日本に傳はり、德川時代に利用された事實を述べて居る。著者が漢字を常用して活字利用に尤も不便多い支那や朝鮮が、アルファベットを使用する諸國民に先つて活字を發明し之を發展させたのは、世界に於ける不思議なる現象の一と認めた點は、吾が輩も全く同感である。

最後の第二十四章は「活字發明者としてのグー

テンベルヒの系圖」と題して、グーテンベルヒの活字發明に影響したと思はるゝ諸要素を歴擧し、その影響の程度を考覈して、東洋の活字がグーテンベルヒに影響した程度は明白でないと論斷して居る。

支那から紙が歐洲に傳來したことは確實である。歐洲の木版印刷に對する支那の影響も四周の事情から推して、先づ事實と承認せなければならぬ。されど活字版に關しては、支那や朝鮮に於ける發明が、西洋のそれに影響したといふ、何等の信頼すべき證據が今日まで未だ見當らぬ。

これがカーター氏の結論である。

印刷術の發明及び發展に關係の深い東西の諸國を列擧すると、(一)支那は印刷と尤も緊切の關係ある紙を發明した上に、世界で尤も早く木版印刷をも活字版をも發明した。(二)日本は世界で現存する尤も古き木版印刷物を剏めた。(三)朝鮮は世界で尤も早く金屬性活字を鑄造した。(四)印度の宗教——佛教——は尤も早く木版印刷の材料となつた。(五)トルコ種族及び蒙古種族は木版印刷を西方に傳播する有力なる媒介者となつた。(六)波斯及びエヂプトには歐洲より以前に木版印刷が行はれた。(七)アラブ人は印刷に必要なる紙を西方に傳播した有功者である。(八)製紙術はスペインを經て歐洲に傳來した。(九)佛蘭西と伊太利とは耶蘇教國の中で尤も早く紙の製造を剏めた。(十)木版印刷術の歐洲傳來には、露西亞と伊太利とがその門戸と見做されて居る。(十一)獨逸、伊太利及び和蘭が、早い時代に歐洲に於ける木版印刷の中心であつた。(十二)和蘭、佛蘭西及び獨逸が、歐洲に於いて尤も早く活字印刷を試行した土地と認められて居る。(十三)活字の發明を完成したのは獨逸人の功績に歸せねばならぬ。(十四)英國と米國とは印刷の初期の歴史には無關係であるが、

近代に於ける印刷機や印刷法の改良進歩には預つて大なる寄與をなした。

以上がカーター氏の新著の內容の梗概である。その研究の範圍は極めて廣く、時には必要以上と思はるゝ程多端に涉つて居る。努力の程も十分に看取することが出來る。兎に角支那の印刷の歷史としては、量に於ては勿論質に於ても亦出色の好著たるを失はぬと思ふ。著者は廣く各方面から多數の材料を蒐集して、よく之を整理しよく之を組織した點に於て、尤もその長所を發揮して居る。忌憚なく申せば、その支那日本朝鮮に關する印刷の歷史には、日本人の立場より觀て格別の創見が見當らぬ。今より十餘年前に、東京で開催された中等學校の地理歷史敎員協議會の席上で、吾が輩は「東洋人の發明」と題して簡單な講演をしたが、その節印刷の歷史に言及しその結論として、

(1)木版印刷は後くも西曆八世紀の半頃に立派に出來て居つた。

(2)活版は西曆十一世紀の半頃に發明された。

(3)金屬性の活字は後くも西曆十三世紀の半頃には東洋で發明されて居つた。と申述べたことがある(『敎員協議會議事及講演速記錄』五頁)。カーター氏の所說も所說は之と同一である。されど中央亞細亞や西亞細亞に關しては、日本人にとつて隨分耳新しい所說が尠くない。又從來の研究なり解釋なりを一層確實にした點が、可なり目に着く。書き振りはやゝジャナリスチックでアカデミックでなく、專門學者には少しく飽足らぬ感を起さしむる所もあるが、平易通俗なるだけ一般の讀者には歡迎されたと思ふ。兎に角歷史に關係ある人や、文化を研究する人には一讀を推奬する。

七

吾が輩は曩に申述べた通り、匆率この書を一閱したに過ぎぬ。平常支那の印刷の歷史に關して格

別の智識を有せぬ吾が輩は、カーター氏の著書に對して十分なる批判を下し得る筈がない。況んや原稿締切り期限が三四日の後に切迫して居る際に於てをやだ。但吾が輩が本書卒讀の間に氣付いた四五の點を左に開列して責を塞がうと思ふ。

支那の印刷の歴史と題する以上、支那の文献が第一の史料として必要である。支那學專攻のカーター氏がこの第一史料を利用することに於て、歐米の一般の東洋學者より優越な位置に立つこと申す迄もない。葉德輝の『書林清話』や、上海の商務印書館印行の『中國雕板源流考』や、殊に北京大學發行の『國學季刊』所收の王國維氏の「五代監本考」を參考せる如き、その一端を窺知することが出來る。されど未だ〳〵不十分と思はるゝ點が尠くない。カーター氏は上記『中國雕板源流考』の外、主として『圖書集成』『格致鏡源』『辭源』等を參考に資せられた樣だが、之を當然のことゝして格別非難するに足らぬ。たゞ此等の書物を利用せる以上、引用書類は一應その原本を檢覈して貰ひたい。勿論著者が忠實に原本まで溯つた場合は多いが、然らざる場合も可なり見當る。著者は、

支那の百科辭典――類書――から引用した書物は餘りに多數で、一々その根本に溯り難い。遺憾ではあるが已を得ない。されど〔印刷の〕歴史に尤も關係深き章句は、一々その根本に溯つて檢覈すべく努力した(一八九頁)。

と述べて居るが、宋の王明清の『揮麈錄』や明の陸深の『金臺紀聞』などにも殊引と見える所があるのは感心出來ぬ。世界に現存する最古の印刷物に關する『續日本紀』の記事や、世界最古(?)の銅活字に關する『高麗史』の記事は、その卷數位は明記すべき必要があらう。『國史志』といふ書名はよく引用されるが、その來歴は極めて明瞭でない。宋代の作といふことは、内容から容易に推測

出來るが、宋の何時頃に誰人が作つたものかすべて不明である。カーター氏が――支那人の著書から引用したとはいへ――何等の注意書きなしに、かゝる書名を引用するのは如何かと思ふ。カーター氏は『辭源』の板本の條下の、

古書多用二卷子一。至レ宋而始有二板本刷印之書一。

と字句を『宋史』の本文の如く誤解して居るが（二〇八頁）、『宋史』の本文は〔高麗〕又上言願レ賜二板九經書一（外國傳三、高麗の條）を限り、以下は『解源』の編者の私案である。原本の檢覈を忽せにした覿面の錯誤であらう。小事ではあるが『椅覺察雜記』の著者を朱昱 Chu yü とせるは（二〇三頁、二一〇頁）、勿論朱翌 Chu I と訂正すべく、明代に銅活字を使用した華會通の事蹟を『說郛』に據ると記せるは（二五八頁）、弘治九年の郁文博の『說郛』の序と訂正せなければならぬ。

次に日本人の著書や論文は、支那、朝鮮、日本の印刷の歷史を研究するに當つて、是非參考に資せねばならぬ。カーター氏は英人サトウ Satow 氏の「日本に於ける印刷の初期の歷史」の外、僅に朝倉龜三氏の『日本古刻書史』を利用したのみで、その他の日本人の著書論文を參考せなかつたのは、大なる遺憾に思ふ。氏は歐洲諸國や支那の諸學者に請益しつゝ何が故に日本に立ち寄つて、專門學者の意見を聞かなかつた歟。若し氏にして日本人の著書論文に今少しく注意を拂ひ、日本の學者と會晤する機會を作つたならば、吾が輩が茲に指摘した、若くば後に指摘せんとする樣な瑕疵はなく、縱令あつても餘程減少した筈と吳々も遺憾に堪へぬ。吾が輩自身が日本人であるといふ、小さい立場からかゝる小言を發するのではない。國境を超越した純然たる學問の立場からの主張である。

大體論はそれ位にして、印刷の史實に就いて一二の意見を申述べたい。支那に於ける印刷の歴史として、第一番に問題になるのは、隋の費長房の『歴代三寶記』卷十二の

開皇十三年(五九三)十二月八日……廢像遺經悉令二雕撰一。

といふ文句である。この雕撰の二字をば雕造と同一に解して、印刷の起源を隋代に置く學者が支那にも日本にもある。之に反對して雕撰の二字を雕二廢像一撰二遺經一の意味に解して、隋代起源說を否定する學者が支那にも日本にもある。カーター氏は譯なく後說に贊して前說を排して居るが(三一頁二〇四頁)、この問題は爾く簡單に片付け難い樣に思ふ。率直にいへば意味晦澁な漢文の一字一句によつて、かゝる學術上重大な問題は決定し難い。されど撰が造又は作と同意義に使用される實例ある以上、明の陸深等が雕撰を雕造と同意義に解釋しても、一概に不當と排することが出來ぬ。雕造とすると一般に雕刻を意味するのである。雕撰の文字を雕廢像撰遺經と解するより、雕造廢像及遺經と解する方が、或は妥當かも知れぬ。この文句を以て直に當時佛經を雕造印行した確證と斷定するのは、勿論早計に失するとしても、同時に佛經を雕造印行したものでないと否定するのも、可なり武斷に過ぐるやうに思ふ。これが吾が輩の態度である。これ以上の積極的立論は、この文獻以外の確たる證據を待たねばならぬ。兎に角この雕撰の文字も、印刷の歴史によく引出される、唐の元の稹白氏長慶集序(『全唐文』卷六百五十三所收)の模勒の字句と共に更に一段の研覈を要することゝ思ふ。

本年七月の『國華』に、敦煌から將來された隋の大業三年(六〇七)の佛畫を收めてある。その佛畫の下方の銘文は本版——活字——の印刷である

といふ。若しこの說を眞實とせば、支那に於ける印刷の隋代起源說は、無上の支持を得る譯である。吾が輩はその原物を親覩し得ぬから、何等斷言は出來ぬが、但『國華』に收載された複製から推すと、この銘文は筆錄であつて印刷とは認め難い。

印刷の起源に關して、近く我が國の學者が續々新しい研究を發表して居る。第一に本年五月に東京で開催された史學大會の東洋史部會で、藤田博士が「支那に於ける印刷の起源」と題して、唐の義淨の『南海寄歸傳』卷四の冊一灌沐尊儀條に、或印絹紙とある一句を根據として、印度には古く佛像の印刷が行はれ、それが支那に傳來したものかとの新說を發表された（大正十四年六月號『史學雜誌』五九頁）。成程この文句は高楠博士の英譯にも Impress the Buddha's image on silk or paper (A Record of the Buddhist Religion etc. p. 150) となつて居る。印度では古く布に模樣を印すること所謂 Printed Textiles が行はれた。その意匠で佛像を印したものかも知れぬ。但印度には遙か後世まで、所謂印刷 Printing は行はれなかつた（Balfour; Cyclopaedia of India. vol. III. p. 294）。從つて支那の印刷は直接印度から傳來したものとは信ぜられぬ。印度で行はれたといふ印像の風が、間接にでも支那の印刷に影響したか否かは、今一段の研究を要すると思ふが、兎に角『南海寄歸傳』のこの一句は、印刷の歷史にとつて一應注意すべき史料であらう。委細は遠からず發表さるゝ由の藤田博士の論文を期待する。

第二は唐の文宗時代の馮宿が、版印日歷を制禁すべしとの上疏である。この上疏は始め市村博士が學界に紹介し、尋いで神田學士がその上疏の年代を確定した（大正十四年十月號『歷史と地理』所收「支那に於ける印刷物の起源」一八頁—一九頁）之に據ると文宗の太和九年（八三五）の頃に、民間

で暦を印刷して居つたことがわかる。これも印刷の歴史にとつて相當貴重な材料と思ふ。

されど單に佛像の雕印や日歴の雕印のみでは、聊か不滿を覺える。更に進んで佛典なり道經なり書物の印行といふ事實になると、從來の史料以外に格別新奇なものは見當らぬ。一部の學者に知られながら、その實未だ十分に研究されて居らぬ史料の一に、唐末の司空圖の爲二東都敬愛寺講律僧惠確一化募雕二刻律疏一(『全唐文』卷八百八所收)中の左の記事がある。

自洛城罔遇時交。乃焚二印本一。漸慮二散失一。欲二更雕鏤一。……再定二不刊之典一。永資二善導之方一。必期二字々鐫銘。種二慧良一而不レ竭。

司空圖は唐末(八三七—九〇八)の人で、印刷の歴史によく引き出される『柳氏訓序』の作者の柳玭と同時代の人である。司空圖のこの勸化文の作られた年代は不明であるが、九世紀の後半期に屬することは疑を容れぬ。然もその以前にあつた洛陽の名刹の敬愛寺所藏(?)印本の燒失したのを、再印する資金を化募したのである。吾が輩は遺憾ながら、今はこの印本燒失の年代を的確にすべき調査の餘裕を有たぬ。

司空圖と同時代の范攄の『雲溪友議』卷十(『稗海』本)に、

紇干尚書泉。苦求二龍虎之丹一。十五餘稔。及レ鎮二江右一。乃大延二方術之士一。作二劉弘傳一。雕印數千本。以寄二中朝及四海精心燒煉之者一。

とある記事は亦相當參考の價値を存するが、餘り學者に注意されて居ない。紇干泉とは紇干臮の誤であらう。『新唐書』卷五十九の藝文志の道家神仙の部に、紇干臮『序通解錄』一卷を收め、その注に、

字咸一。大中(847—859)中江西觀察使。

とある。江西觀察使に在職した點といひ、神仙煉

丹と關係ある『序通解錄』を著はした點といひ、この紇干臮こそ『雲溪友議』の紇干泉に相違ない。南宋の鄧名世の『古今姓氏書辯證』卷卅七にも江西觀察使紇干臮を擧げてある。

この紇干息が江右を鎮して江西の觀察使となつた年代は大中の初期らしい。吾が輩は今紇干臮の江西觀察使としての年代を、より正確に考證すべき時間の餘裕を有たぬ。たゞ『江西通志』卷四十六に、唐代の江南西道都團練觀察處置等使を擧げて、周墀の次に紇干象（臮の誤？）を置き、更にその次に裴儔、周敬復を置いてある。周墀は武宗の會昌の末年（八四六）十一月に江西觀察使から義成軍節度使に轉じた人（『舊唐書』卷十八下）、周敬復は宣宗の大中四年（八五〇）十二月に華州刺史から江西觀察使に轉じた人（同上）である。是に由つて推測すると紇干臮が劉弘傳數千本を雕印したのは、西曆八百四十七八年の交と認めて大過ない。年代は馮宿の上疏より十二三年後くれるが、書物殊に佛典以外の書物を印刷した點に於て記憶すべき史料と思ふ。

朱翌や葉夢得や宋人の記事は姑く措き、以上が唐人の印刷に關する重なる史料である。カーター氏の著書には、元稹の白氏長慶集序を紹介するのみで――『柳氏訓序』は葉夢得より引用して居るが――、『雲溪友議』は文句不可解として斥けて居るのは、文獻上から觀て不十分と申さねばならぬ。

九

カーター氏がその第三章に、印刷の先驅として石經に言及したのはよい。されど儒敎の石經に限つて、佛敎の石經の存在に就いて一言も記述せぬのは、如何なる理由であらう歟。著者が支那人の記錄が、兎角佛敎關係の事實を輕視する弊害多きを嘆じて居るのは同感であるが、その著者自身にも時にこの傾向の見えるのは遺憾である。直隷省

房山縣の石經山の刻經は、北齊の慧思の發願で、その弟子の靜琬が實行に着手し、爾來數十百年に亙つて繼續されたもので、その規模の大なる點に於て、その今日に保存されて居る點に於て、漢魏時代の儒敎の石經と同日に論ずることが出來ぬ。その現狀は我が松本博士や常盤博士によつて詳細に紹介されて居る。

カーター氏が第十章に於て、支那、朝鮮、日本の大藏經の來歷を述べながら、契丹の大藏經を佚したのも遺憾を免れぬ。この契丹の大藏經に就いては、妻木直良氏の有益なる論文が發表されて居る（大正元年九月號『東洋學報』所收の「契丹に於ける大藏經雕造の事實を論ず」參看）。

著者が第二十三章に朝鮮の活字版を論じて、朝鮮の銅活字は朝鮮（李朝）時代に拙つたといふ斷案に對しては反對せなければならぬ。又著者の支那の銅活字は朝鮮から傳へたといふ斷案に對しては、贊同を躊躇せなければならぬ。

朝鮮の金屬製活字卽ち所謂鑄字は高麗時代から使用されたことは、已に早く淺見倫太郎氏によつて學界に紹介された。高麗の李奎報（一一六八——一二四一）の『李相國後集』卷十一所收の新序詳定禮文跋尾に、

> 遂用二鑄字一。印二成八詳定禮文一二十八本一。分二付諸司一藏レ之。

とあるに據ると、西曆十三世紀の前半に、李朝の開基年代より百五六十年も以前に、朝鮮で金屬製の活字を使用せしこと疑を容れぬ。

この時代に支那で金屬製活字を使用した文獻上の證據は未だ見當らぬ。從つて文獻上から觀れば金屬製活字は朝鮮の方で早く使用せられ、それが支那に傳來したものとも推斷することが出來る。現に朝鮮の學者達は銅活字は朝鮮の發明だと自慢して居る。カーター氏の所說にも相當の根據がな

い譯でない。併し支那では銅製活字使用に關する記錄は見當らぬが、銅を版木の代用として印刷に使用したことは隨分古い。後晉の天福年間（九三六―九四三）に刊行された所謂天福銅版本の名が南宋の岳珂の『相臺書塾刊正九經三傳沿革例』に見えて居る。又『元史』卷九十三の食貨志に、

初鈔印用レ木爲板。〔至元〕十三年（一二七六）鑄レ銅易レ之。

と見えて居る。兎に角木版の代りに銅版が使用された以上、宋元時代に支那で木製活字の代りに、桐製活字が使用されぬであらう歟と、想像を容るべき餘地が尠くない。勿論文獻上にも實物上にも證據は見當らぬ。我が國に支那より古い陀羅尼の摺本があつても、多くの學者が我が國の印刷術は支那から傳來したものと認めると同樣に、銅活字が支那より古く朝鮮の記錄に見はれて居つても、その銅活字は最初支那から傳來したものと考へられぬであらう歟。勿論これは想像である。兎に角銅活字は朝鮮が本家で、朝鮮から支那に傳つたものと、簡單には斷定出來ぬ。この問題は將來一段の研究を待つて決すべきものと思ふ。

十

直接印刷とは關係のない事項ではあるが、本書閲讀の際に氣付いた誤謬も尠くない。著者は唐代に於けるアラブ人の通商を說き、その支那に於ける貿易港のカンフウ Hanfu を抗州（浙江）に擬定せずに、之を廣州（廣東）に擬定したのは（二二九頁）間違つて居らぬが、但その擬定の根據を一九二二年の『通報』所載のペリオ氏の主張に置いた點が問題である。ペリオ氏の主張は實に次の如きに過ぎぬ。

アブ・ゼイド Abū Zayd はヘヂラ曆の二六四年、卽ち西曆の八七八年に於ける〔賊軍の〕カンフウの攻圍のことを述べて居るが、このカンフウは吾が輩の所見によるとカントンのことで、レイノー Reinaud 氏の信ずる

如く杭州には關係せぬ。黄巢がカントンを占領したのは西暦八七九年のことで、黄巢傳にも委細に當時カントンで行はれた外商の貿易のことを記載してある。(Toung Pao, 1922. p. 410)。

これでは學界少くとも歐米の學界に於て從來難解視された、カンフウはカントンなりや杭州なりやの問題は、未だ根本的に解決されて居らぬ。第一に西暦八七八年と八七九年との年代不一致の點にも何等手を觸れて居らぬではない歟。かゝるペリオ氏の主張を唯一の根據に、カンフウ問題を解決した樣に思惟するカーター氏の態度が間違つて居る。この問題については吾が輩が早く、より正確な解決を發表して置いた(大正八年一月號『史林』所收の「カンフウ問題殊に其陷落年代」)。故にカーター氏にしてカンフウ廣州說を主張せんとするならば須らくこの論文を參考すべきである。

五代の馮道を四朝七君に仕へたと記せるは(四九頁)、事實を失して居る。彼は大官として後唐の莊宗から後周の太祖に至る、四朝九君に仕へた。若し遼をも加算すれば正しく五朝十君に仕へた。五代の國都や北宋の國都を長安の如く記してあるのも(四八頁、七二頁)、無論間違である。長安は唐の滅亡後最早國都でない。元時代に戲曲や小說の流行したのは事實であるが、之を波斯の影響の如く解釋するのは(六〇頁)餘りに牽强であらう。西暦一二六〇年に忽必烈は帝位には卽いたが、未だ全支那を征服して居らぬ。カーター氏の記事(七五頁)は間違つて居る。

張騫が親しく蒲陶や肖蓿を支那に將來せりと記し(八六頁)、北宋末の朱彧の『萍洲可談』の記事を誤解して、十二世紀の當初にアラブ人が航海に羅針盤を使用せし如く記せるは(九三頁)、皆間違ひである。前者に就いては、吾が輩は已に『續史的研究』(「張騫の遠征」八六—八七頁)中に意見を

述べてあり、後者に關しては、『蒲壽庚の事蹟』（一二七―一二九頁）中に意見を述べてあるから、茲に繰り返へさぬ。最近のソーシュル Saussure 氏なども同樣『萍洲可談』の記事を誤解して居るが（L' Origine de la Rose des Vents et l'Invention de la Boussole. p. 39）、今更ながらヒルト氏の誤譯の惡影響の大なるに驚くの外ない。

カーター氏は紙の西傳に關係深き怛羅斯（タラース） Taraz の戰役を、トルコ種族の二君主の爭が本で、大食と唐とが各自その一方に味方して開戰となつた樣に記して居るが（九七頁）、之も間違ひで、實は唐と石國との爭を、大食が石國の後援をした爲め、唐と大食との開戰となつたのである（明治四十四年九月號『藝文』所收の「紙の歷史」二一―二二頁參看）。唐の武宗時代の佛敎抑壓政策が、宣宗の末年まで繼續された樣に記錄してあるのも間違で（二〇四頁）、この政策は武宗一代に限り、宣宗時代には佛敎は復活して居る。茶が十世紀の頃まで北支那に普及せなかつたとの主張（二二七頁）は勿論間違ひで、已に八世紀の頃には北支那に喫茶の風が流行して居る（『續史的研究』所收の矢野博士の「茶の歷史に就いて」二三八―二五〇頁參看）。

著書の眞價はその記事の間違ひの多少のみによつて決定するものでない。廣い方面に涉る研究に間違ひの生ずるのは寧ろ當然であらう。カーター氏の著書の中に、上來指摘した如き瑕疵があつても、格別その聲價を影響するに足らぬ。されど他日この書を再版の機會に、著者が吾が輩の所說を參酌して然るべき訂補を加へ、一層の善美を盡したならば學界の爲に幸福と思ふ。（十一月二十八日稿）